

2018年度 須磨学園中学校 入学試験問題 第2回

国語 出題意図

全体について

2018年度の問題作成にあたり、須磨学園のスローガンである「to be myself,…」に基づき、従来の方針や様式を継承しつつ、受験者の学力を検出できるよう配慮した。また、「知識を中心とした漏れのない基礎力」に基づき、「内容・表現・心情について深く思考し表現できる応用力」をどれだけバランス良く兼備しているのかを判定できる試験問題を目指した。

以下は、問題作成担当として、留意した点である。

- (1) 問題は、昨年度から「小問集合」を1題削って2題構成とし、「説明文」「小説文」の配列、150点の配点、60分の問題とした。
- (2) 出題範囲と問題構成は、受験者が学んだ基礎的かつ基本的な力が反映されるよう配慮した。受験者の思考過程に沿った設問及び設問形式となるように構成し、各設問の難易度のバランスを考え、識別力のある問題となるよう留意した。
- (3) 問題文や設問及び選択肢の吟味には、上記の学力を問うものなるよう細心の注意を払うとともに、リード文や注は受験者の理解の一助となるよう工夫した。

各問題について

□ 西研『哲学の練習問題』からの出題。「理解する」「分かる」ことを最も大事にしがちな現代の人間関係のありように対して、「信頼」や「対話」の重要性を説いた文章。後半では、前半の議論をさらに深め、現代の大学生が他者から嫌われることを最も恐れているという事例を挙げ、その原因について、大学生たちが人生の目標を失っているからではないかとしている。本校が考える自己実現の上でも、自分と他者との関係を捉え返す題材としてふさわしいと考え、出題した。

問題は、基礎知識について問うたもの(問一、五、九)、傍線部の内容理解(問二)、傍線部の理由把握(問七)、第1回に引き続き、論理的思考を試す問題(問一、四)も出題した。

問四は、前後の段落関係から当段落の働きについて考える問題であるが、目の前の文章だけに注目しすぎるのではなく、文章を大局的に捉え、その意味するところを答える視点が要求される問題となった。

問六は、傍線部の内容を、本文とは関わりのない例文を通して理解する問題である。抽象的な内容を具体的に把握することができているかどうかを確かめた。

□ キョウコ・モリ『シズコズドーター』からの出題。まだ中学生だった主人公の有紀を残して、一人先立った母親の静子。母静子と娘有紀、妻静子とその夫秀樹との人間関係など、複雑に入り組んだ関係から、静子の死の真相や、有紀への愛情が語られている。物語の個別性を超え、家族一般にとって、また子どもにとって、「母」とは、いったいどういう存在なのかを考える上で最適な素材と考え、出題した。

問題は、文章内容から人物像を把握する問題（問六）や、心情把握の問題（問一、四）といった基本的な設問から、本文内容の正確な理解を求める問題（問三、問五）、人間関係を踏まえつつ発言の趣旨を理解する問題（問七）など、多様な形式の問題により、受験生の総合的な読解力を試す問題となった。

新しい出題形式の問題としては、この問題のテーマである問九において、あえて本文に傍線を引かず、「有紀」の「精神的な自立」というテーマを与え、受験者の考えを記述させる問題を作問した。これは、本文内容全体を視野に、【A】において死を前にした静子の遺言が娘の未来に暗い影を落とすであろうことを予想した上で、その強すぎる愛情から解放されることが、有紀の精神的自立につながることを読み取らせる意図で出題した。